

あとがき

アンサンブ・ヒーローに感謝

専修大学スポーツ研究所 所長

佐竹 弘靖

2019年度専修大学研究所報を発行できる運びとなりました。

専修大学スポーツ研究所は、今年度も『「日本基準」から「世界基準」へ』のタイトルのもと、日本スポーツ界で活躍し、また貢献されている多方面の方々をお招きして大変有意義な公開シンポジウムの開催いたしました。また、所員が中心となって実施される研究会では専門的な知識を深めてまいりました。さらに、近隣住民への大学開放を目的とする公開講座「中高年の健康を考える」を開催するとともに、専修大学少年少女レスリング教室では、教室生の根本さんがブルガリア共和国で行われたカデット(16・17歳)レスリング選手権53キロ級で銅メダルを獲得し、川崎市長を表敬訪問を行ったことは大変誇らしいことと所員一同喜んでおります。

本年度は2020年東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて特別な年でもあります。専修大学スポーツ研究所は日本ビーチバレーボール協会と提携を結び、選手強化のサポートに取り組んでおります。さらに選手の体力の増進や競技能力の向上を

目的とする低酸素室トレーニングの充実や新しい視点としてドライバナナプロジェクトを立ち上げ製品化へのアドバイスを行ってまいりました。

さらに、2020東京オリンピック・パラリンピックに向け、日本で初めてのオリンピック選手として出場し、「マラソンの父」、「箱根駅伝生みの親」として歴史に名をとどめる金栗四三氏の足跡を本学図書館と連携して展示会を開いたことも特筆に値するでしょう。

さて、タイトルの「アンサンブ・ヒーロー」とは直訳すると「歌われない英雄」ですが、これは「縁の下の力持ち」と訳することもできます。専修大学スポーツ研究所の多岐に渡る行事は、研究所所員である若手の研究者の尽力を抜きには語れません。研究、教育と多忙な中でありながら準備に多くの時間を費やして成功に導いてくれています。まさに「アンサンブ・ヒーロー」です。また、多くの所員は2020東京オリンピック・パラリンピックのコーチ、強化スタッフなど様々な分野に関わっております。メダル獲得に向け華やかな舞台上に登場することはないか

もしれませんが、大切な役割を担っています。まさに「アンサンブ・ヒーロー」です。

所員の皆さんの尽力には「感謝」の言葉以外見当たりません。

この原稿を書いている際中、衝撃のニュースが飛び込んできました。

新型コロナウイルスの猛威が日本にも押し寄せ、感染者の増加にともない政府が「不要不急の集まりを避けるよう」と呼びかけています。そのため東京マラソンの一般参加の部を中止したのを筆頭に多くのスポーツイベントが相次いで中止に追い込まれています。

そこにきて2020東京オリンピック・パラリンピックの中止・延期も話題に上り始めています。世界各国から多くの人々が集う平和の祭典です。それだけに最悪の場合、苦渋の決断が下される可能性はないともかぎりません。新型肺炎の早急な終息を願うばかりです。

最後に、専修大学スポーツ研究所の運営にあたり大学より多大なご支援を賜っていることを深く感謝し、ここに御礼を申し上げます。